



スカイベリー誕生秘話(3)

生産者編 江俣 伸一さん (鹿沼市)

いちご王国とちぎ。長年日本一の座を守っているが、九州勢の激しい攻勢を受け、予断を許さぬ 戦国時代に突入した。

何としても王座を守り抜くために新品種を生み出さねばならない。県農業試験場いちご研究所の 研究スタッフは幾多の苦難を乗り越えてついに新品種・スカイベリーの育成に成功した。栽培農家 の実証栽培も良好で、26年からは一般栽培に入った。期待の星は順調に育ち、現在栽培されてい る27年産の栽培農家は184戸、面積12・2ヘクタールと前年に比べ2倍に増えた。贈答品を中心 としてブランド力も着々とアップし、流通市場は首都圏から仙台、盛岡へと拡大した。

心にブラン ドカア



栽培農家 面積とも倍増

が違ってもいちごの作り と手ごたえを感じた。品種 ていた。「これはすごい」 リーは見事なオーラを放っ

ば抜けた品種。今まで見た いました」 までのものとは明らかに違 した。遠目に見ても、これ ことがないようないちごで

「大粒で色艶が良くてず

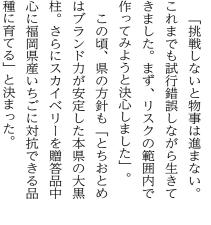
印象を語る。 江俣伸一さんは、スカイベ リーを初めて収穫した時の

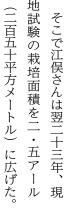
江俣さん一家は代々いちご を生かしながら慎重に育て ので、これまでのノウハウ 栽培農家、初めての品種な イベリー三十株を定植した。 究所の研究員が訪れ、スカ して県農業試験場いちご研 上都賀農業振興事務所を通 二十二年九月七日だった。 の試験栽培を始めたのは、 江俣さんがスカイベリー

の時を迎えた時、スカイベ そして十一月下旬、収穫

鹿沼市のいちご栽培農家

かった。 ベースは、作ってみないと分からな 栽培農家にとって、最も大切な採算 方はだいたい分かる。だが、 いちご







江俣伸-ーさん



こですね」

スカイベリーは病

ます。そこが辛いと 待ちになってしまい も、それを実行でき 思ったことがあって と良いだろうなと きました。こうする の環境を合わせてい

るのは次の年、一年

植えられている株に色むらが出てき 寒くなる前までは良かったが、十二 するには、どうしても何年もかかっ きない。品種にあった栽培法を確立 あるので経験を生かして対応した。 た。どの品種も多少こうした傾向が 月・一月の厳寒期になると北向きに 年に一作なので、植え直しがで

い部分を改善していった。そして翌 てしまう。そこで、育てながら細か

を均一に調節する循環扇も取り付け 伸ばす温度管理に工夫を重ね、温度 甘みを出すため、果実の成熟期間を るので、 向きにした。これで色艶が良くなっ 植えから一条植えに変え、花房を南 応して日当たりを良くするため二条 た。二作目の経験から、厳寒期に対 る。二十四年から実証栽培を開始し た。また、肥料が多いと果形が乱れ 施肥のバランスをとった。

> が太くて大きい果実マットを敷いた。 置、これまでの三作の反省を生かし 立した換気センサー(感知器)を設 閉して換気する、とちおとめとは独 五アール (五百平方メートル) に拡 栽培面積を一気にこれまでの二倍の て、果肉に傷がつかないように網目 大した。ハウスのサイドを自動開 カイベリー専用ハウスを二棟新設、 二十五年からの実証栽培では、 そして、二十六年九月から本格的 ス

な一般栽培を開始した。美味しくて、

多かった。これな 気に強く、収量も

ら採算ベースに乗

品種、 生産者にとって魅力ある素晴らしい が開けてきた。 ちご経営における採算ベースの展望 流通に売り込める段階になった。い カイベリーは、贈答品を中心として ねてきた体験と工夫が実を結び、ス 大果で収量が多く、病気にも強い。 これまで試行錯誤しながら積み重 スカイベリーは順調に育った。

現地検討会で意見交換

しい。生産者はそれぞれ勉強して いちご栽培は一人だけの力では難

いるので、意見交換し が至上命題だった。 体制を整えていくこと 数をそろえて出荷する 多勢で栽培し、品質と 販売量を確保して流通 培技術習得が短期間で れば、何年もかかる栽 した研究成果を持ち寄 ていくチームプレーが に乗せていくためには、 済むメリットがあった。 大切だった。皆が体験 て良いものを取り入れ



ことを生かした。 年、体験・観察した

た。

て、そこを伸ばして いくために、ハウス

「良い所を見つけ

(左から)石原良行・いちご研究所長、江俣伸一さん、水沼正好・上都賀農業振興事 務所経営普及部部長補佐

特に嬉しくて、疲れが吹き飛びます。特に嬉しくて、疲れが吹き飛びます。スかイベリーの一般栽培まで漕ぎつけ、カイベリーの一般栽培まで漕ぎつけ、です。値段も新聞市況では上回ってです。値段も新聞市況では上回ってきており、これも励みになっていまきており、これも励みになっていまきており、これも励みになっていまが「おいしい」と言ってくれた時はが「おいしい」と言ってくれた時はが「おいしい」と言ってくれた時はが「おいしい」と言ってくれた時はが「おいしい」と言ってくれた時はが「おいしい」と言ってくれた時はが「おいしい」と思います。

究所の研究員も参加、いろいろな相興事務所の普及指導員と県いちご研

換している。これには上都賀農業振

談を受け、アドバイスしてきた。

江俣さんは、スカイベリーに挑戦

した想いを次のように振り返る。

新しく始まる人もあるので、技術

究会」の会長。二カ月に一回、

農協スカイベリー(i27号)栽培研

イベリー現地検討会を開き、

意見交

二人三脚で大賞を受賞

いちご栽培は家族ぐるみ

実績を基に普及拡大

測り、 すが、 ドバイスをしてきました。 ど栽培全般にわたりア 聞き一緒に考えながら支 補佐は「栽培農家の声を なく大変だったと思いま 実証栽培の頃は人数も少 的にテイストして糖度を 温度データをとり、定期 援してきました。スカイ 沼正好・経営普及部部長 で指導に当たってきた水 リーの栽培ハウスで、 上都賀農業振興事務所 江俣さんはさまざ 温度管理や施肥な

を通して作業全般にわたって妻・勢を通して作業全般にわたって妻・勢を通して作業全般にわたって妻・勢とさんと二人三脚でやってきた。昨年は「第八回いちご王国グランプ大賞を受賞した。江俣さんは「妻との共同作業で今日まで進んできました。この大賞はとちおとめできました。この大賞はとちおとめできました。この大賞はとちおとめでちました。この大賞はとちおとめでとしても取れない賞なので感慨もひとしおです」と感謝の気持ちを話す。そとしおです」と感謝の気持ちを話す。そ

手塩にかけた子供のように

石原良行・いちご研究所長は「私 を研究員は、いちごの新品種を開発 して生産者の皆様のところへ届けます。そこからグループ勉強会など工 大して育てていただくことで、いち ご産地・農家の活性化につなげても らえることは大変ありがたいと思っ でいます。研究所の開発によって新 品種が生まれ、それが栽培農家の皆 さんに育ててもらい、市場に流通し さんに育ててもらい、市場に流通し さんに育てた子供を世間 は、手塩にかけて育てた子供を世間 に出したような気持ちで、本当に嬉 しい」と笑顔で話してくれた。

すな実ドど測的温べ援聞補沼で指がく証がおりに度り

を言われると嬉しい。栽培農家と一と言われると嬉しい。栽培農家と一と言われると嬉しい。栽培農家と一大切だと思います。他のいちご栽培 大切だと思います。他のいちご栽培 大切だと思います。他のいちご栽培 大切だと思います。他のいちご栽培 と言われると嬉しい。栽培農家と一 と言われると嬉しい。 大切だと思います。 でいく気持ちが 大切だと思います。 他のいちご栽培 と言かて見ており、江俣さんのように とができます」と嬉し がは新たな取り組みを自信を持って さって表情を見せた。